

親子で楽しむ 邦楽演奏会

平成30年3月4日[日]

国立劇場小劇場

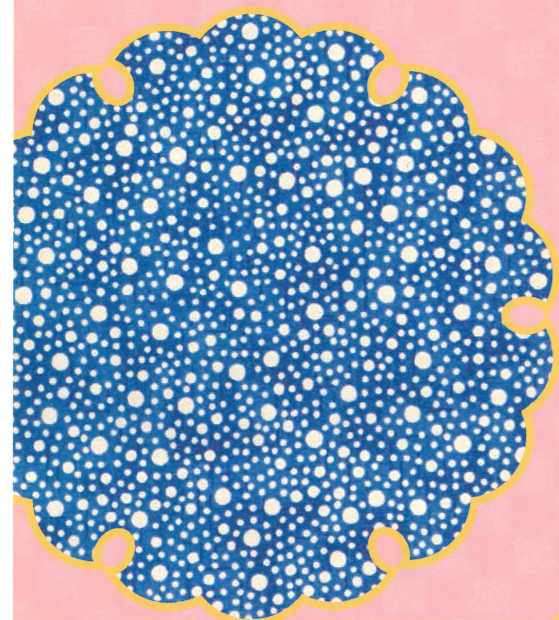
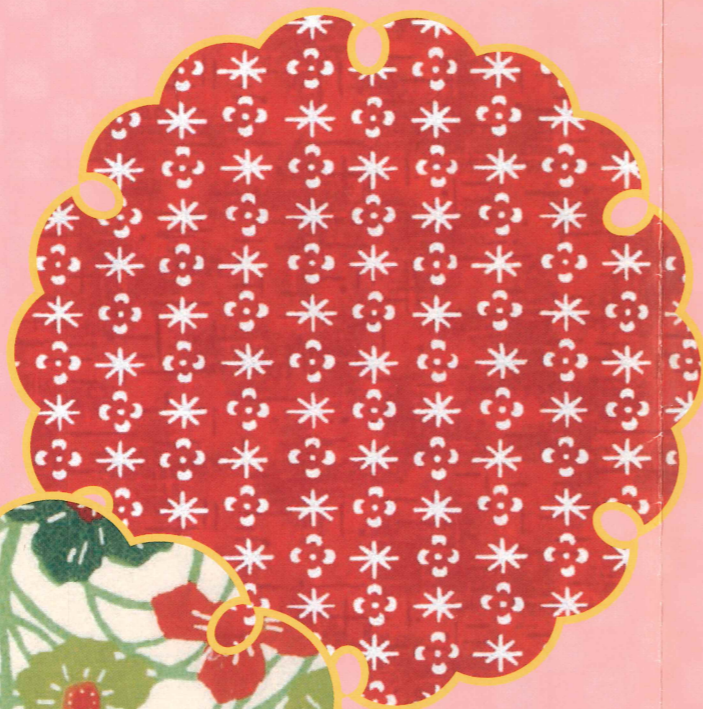
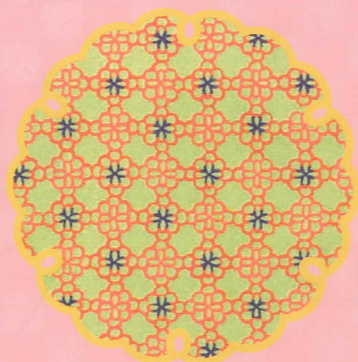
〔鑑賞〕開場10時30分／開演10時45分

〔主催〕邦楽実演家団体連絡会議

〔助成〕東京都・(公財)東京都歴史文化財団

〔後援〕(公財)日本伝統文化振興財団

NPO法人子ども劇場東京都協議会



この演奏会は、「東京2020文化オリンピック」として実施します。
東京2020文化オリンピックは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に向け、文化芸術の力で地域を活性化し、若者の参画促進や創造性を育むことで、2020年から先の未来に日本や世界の文化を継承していくことを目指しています。

常磐津「新山姥」 (しんやまんば)

(金太郎)

浄瑠璃(じょうるり)

常磐津 若羽太夫

常磐津 千寿太夫

三味線(しゃみせん)

常磐津 美寿郎

岸沢 満佐志

八王子車人形

西川 古流座

怪童丸 西川 古柳

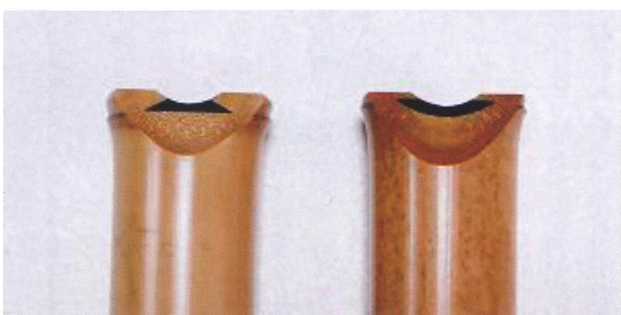
山樵 西川 義輝

山姥 西川 創

八王子車人形は江戸時代から伝わる車人形で、3つの車がついた箱形の車に腰掛けて、1人が操る、特殊な一人遣いの人形芝居です。



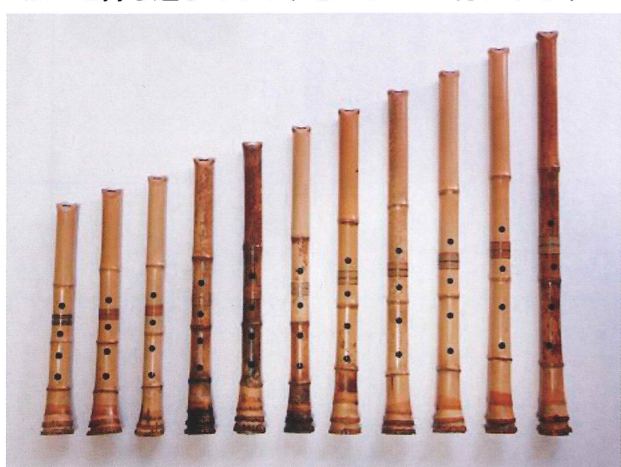
尺八各部の名称



琴古流の歌口 都山流の歌口



加工と持ち運びのしやすさから2つに分かれます



声の高さや曲により異なる長さのものを使用します

尺八の歴史

尺八は、当初は外来の楽器として我が国に渡来し、その後わが国の文化発展の中で独自のものとして発達して現在に至っています。尺八という名称は昔の中国において使用され始めたものであり、その由来は管の長さを表したものです。一尺八寸という長さの寸法は時代と共に変遷してきているものの、現在の八寸管の長さはその名の通り一尺八寸(54.5cm)相当であり、中国において名付けられた名称の考え方がそのままもわが国で、また全世界で使用されています。ちなみに、正倉院に残っている8本の尺八は現在のものよりかなり短い(34~41cm)ものです。この聖武天皇が愛用したとされる正倉院の尺八、そしてそれより古く聖徳太

子が吹いたとされる法隆寺の尺八(現在は東京国立博物館蔵)は、表に5孔(現在の尺八は4孔)、裏に1孔の6孔尺八である点に大きな特徴があります。いずれも中国から渡来した音階を奏するためのと考えられ、6孔で演奏するのに適した音楽を演奏したもので、具体的には雅楽の旋律を演奏したものと考えられますが、残念ながら現在の雅楽演奏では尺八は使用されていません。この古代尺八とも言われる尺八ですが、その後平安・鎌倉時代には源氏物語、今鏡や十訓抄などに尺八使用が窺われる文献があるものの、社会の中で楽器として普及、発達する事はありませんでした。中世になると5孔の尺八が生まれ、一節切(ひとよぎり)と言わ

れる節が一つの竹で作成されたものが普及します。室町時代に生きた一休さん(一休宗純)は友人と共に尺八を嗜んだ文書が残っています。江戸時代になると今や時代劇で見ることができなくなった虚無僧が全国で登場します。虚無僧は普化宗という宗派の僧で、お経を唱える代わりに尺八を吹いて托鉢を行ったことから尺八は楽器から法器になったと言われており、また虚無僧以外は尺八吹奏が禁止されていた時もありました。この虚無僧が吹いていた尺八が楽器として、また本曲(ほんきょく)という音楽として今日に繋がる尺八と言えます。

解説

金太郎は浦島太郎や桃太郎と異なり、平安時代の実在の人物であり、江戸時代に歌舞伎などの題材として取り上げられ、後に子供向けの御伽噺として一般化したものとされます。今回の新山姥のあらすじは、山姥こと彫物師十兵衛の娘「八重桐(やえぎり)」は京にのぼった時、宮中に仕えていた坂田蔵人(さかたのくらんど)と結ばれ、故郷の足柄山に戻って息子(怪童丸)を出産しますが、坂田蔵人が亡くなったために京には帰らず女手一つで息子を育てます。日々、怪童丸はマサカリを担いで薪を取り、動物たちと仲良く暮らし、熊と相撲を取ったりと少年とは思えぬ力強さで母を助けます。そこで都の源頼光の使者「斧藏(よきぞう)」の目に留まり京に連れられ、坂田金時と名付けられて源氏方の武士として迎えられます。のちに源頼光四天王(渡辺綱、坂田金時、碓井貞光、卜部季武)の一人として出世し大活躍することとなります。この坂田の金時が「マサカリを担いだ金太郎」です。源頼光四天王は丹波国大江山での酒呑童子討伐が有名ですが、これが御伽噺の金太郎による鬼退治に繋がっています。

歌詞

四面葎々(がが)たる足柄山、オオ阿保(おおくろ)、今日はまだ逢いませぬの。オオ山賤(やまがた)の斧藏(よきぞう)殿。また焚火の御馳走(ごちそう)しようかいのうそれは忝(かたじけ)ねえ。時に小僧はどうしましたな。さればいの、後の麓(ふもと)まで連れ立って来ましたが、大方猪猿(ぶたざる)を相手に、相撲(まむ)がなとつていましようわいな。それは危ない。早く呼ばつせえ呼ばつせえ。あれあれ御覧(ごらん)じませ。あのような大きな石を弄(もてあそ)んで、怪我(けが)でもしたらどうしようと思やるぞ。道草(みちくさ)も程がある。コリヤ怪童丸(かいどうまる)、コリヤ怪童丸(かいどうまる)やあい。オオオ。神楽月(かぐらづき)とて片山(かたやま)を、笛(ふえ)や太鼓(たいこ)で面白(おもしろ)や。足の冷たいに草履(わらじ)買(か)うたもれ。子をとり、子をとり、どの子が目づき、あとの子が目づき。籠(かご)め籠(かご)め、籠(かご)の中の鳥(とり)は、いついつ出やる。夜明け(よあけ)のぼんに、つるつるつるつるつるつる。木の根笹原(ねざさはら)潜(ひそ)りくぐって、ひよいと出た稚児(わらわ)みどり。ホホウ、この程(ほど)より心(こころ)をつけて窺(うかが)うところ、さては柔弱(じやく)非力(ひりき)にゆうじやくひりきを悔(く)やみ、横死(おうし)を遂(つ)げた坂田(さかた)の蔵人(くらんど)が妻(つま)悴(せが)れ、この山中(やまなか)に籠(かご)ると聞きしが、もしや二人(ふたり)は。いかにも、その坂田(さかた)の家(うち)を起(た)さんと、山神(やまがみ)へ祈誓(いのちかぎ)を懸(か)け、即ちもうけしこの怪童(かいどう)。さてこそ我が推量(おしりょう)に違(ちが)わず、時行(ときゆき)ときゆきが妻(つま)悴(せが)る。さるにても、女(め)に稀(まれ)なる志(こころ)、その丹精(たんせい)に山神(やまがみ)の加護(かご)、悴(せが)が勇力(ゆうりき)さぞあらん。力の程(ほど)が見たい見たい。おもちれえ、おもちれえ。これ怪童(かいどう)、大事(だいじ)の所(ところ)じや、負けまいぞ。オオ合点(あてん)だ。神変(しんべん)不思議(ふしぎ)の怪童丸(かいどうまる)、此方(こなた)あしらう勇力士(ゆうりきし)、怪童(かいどう)いらつて方(かた)へなる、松(まつ)の根(ね)こぎに引(ひ)抜き、につくと笑(わら)って立(た)つたりしは、人も恐(おそ)るるばかりなり。松(まつ)の根(ね)こぎ面白(おもしろ)い。サア打(う)つてこい怪童丸(かいどうまる)。合点(あてん)だ。打(う)つてかかれば身(み)をかわし、すかさず強氣(きやうき)の力(ちから)瘤(うぶ)ちからこぶ。幹(みき)より腕(うで)の節(ふし)くれ、碓(うし)つ。かと掴(つか)めばめりめりめり、えんや、えんやと捻(ひね)合(あ)いしが、中(なか)よりやつと捻(ひね)切(き)つて、左右(ひだりみぎ)へ別(わか)れて立(た)つたりしは、目(め)覚(さ)ましかりける次第(しだい)なり。

「人形風土記」

長澤勝俊 作曲

篠笛 望月美都輔

尺八 友常毘山

樋口景山

三味線 杵屋 三澄那

琵琶 首藤久美子

箏一 平田紀子

箏二 山水雅楓

十七絃 田中奈央一

打楽器 梅屋喜三郎

望月実加子

作曲家の長澤勝俊は1923年に東京で生まれ、日本大学芸術学部を卒業した後、人形劇団ブークで人形劇の音楽を演奏、作曲。1964年の日本音楽集団結成時からメンバーとして数々の邦楽作品を作曲しました。昨年の邦楽演奏会で演奏した「子供のための組曲」と今回演奏する「人形風土記」は初期の作品であり、また彼の代表的な曲でもあります。人形というものに對する思いを彼は次の様に語っています。
：子供と人形と私…

私にとって子供と人形との縁はきつてもきれいなもののように思われます。戦後の幾年かを人形劇団に所属し、これの作曲と演奏をするかたわら人形達と共に日本国中をまわり多くの子供達と接してきた私にとつて、日本楽器との出会いの第一作が「子供のための組曲」であり、第二作が組曲「人形風土記」であったことも、今考えれば至極当然のなりゆきであったわけです。子供の世界もまた人形の世界もともに素直であり、けがれない美しさに満ちたものです。しかもその素朴なありのままの世界のなかに人間の生命力の根源を感じさせるものを秘めています。私はこのすばらしい生命力に触発され、日本の楽器に新しい息吹を与えようと希（こいねが）いました。

「人形風土記」は組曲で、ニポポ、こけし、のろま人形、流しびな、キジ馬、木うそ の6種類の人形を題材にしていますが、今回は時間の関係でのろま人形とキジ馬は割愛して演奏します。それぞれの解説をレコードジャケットから拝借し、下欄に記載しました。

解説

琵琶「浦島太郎」

琵琶(びわ)

平野 旭鶴

日本の各地には浦島伝説と言われる民話があり、また世界的にも類似の構成の話があるといわれています。原型は千数百年以上前のものとされ、明治時代に国定教科書に掲載されて一般化しました。現在御伽噺として一般的に語られているあらすじは、浜で子供たちにいじめられていた海亀をお金で買って助けた浦島太郎は、数日後に現れたその亀に連れられて海中にある竜宮城に行き、乙姫様の歓待を受けます。竜宮城で三年間の夢のような楽しい毎日を過ごしましたが、母親が気になって帰る意思を乙姫様に伝えるとお土産として玉手箱を貰い、助けた亀に乗って元の浜に帰ってきます。するとどうした訳か場所以前の浜なのに自分の家が見当たらず、家族をはじめ知っている者が一人もいません。竜宮城の三年間は浜では三百年だったのです。途方にくれた浦島太郎は、絶対に空けてはいけなといわれていた玉手箱を開けたところ、白い煙が飛び出し、浦島太郎は見る見るうちに白髪のおじいさんになってしまったというものです。この後、浦島太郎は鶴となって昇天し、乙姫様が亀となり末永く仲良く暮らしたというおまけが付く場合もあるようです。助けた亀の恩返しのお話としてよりも、神様の世界と人間の世界では時間の流れが異なるというお話と考えた方が分かりやすいかも知れません。

解説



ニポポは古くからアイヌに伝わる木彫りの信仰人形。ニポポとは、木の小さな子という意味である。曲は単純な旋律のくり返し、そのたびごとに変を伴って行なわれる。ひたむきな信仰、祈りの心につらぬかれた、哀愁をおびたウポポ(歌)である。全合奏。



流しびなは鳥取地方に古くから伝わる民俗行事から生まれたものである。ひな祭りときに、川にひなを流して厄をはらい、子供の健康と幸福を祈るといふ。子供のために災いを一身に受けて沢山のひなが流されて行くひな流しの情景が、篠笛と箏群によって美しく描かれる。



こけしはよく知られている通り、東北地方に伝わる古い伝統的な郷土人形。篠笛と2本の尺八によって描きだされる世界は、こけしのふるさと、山ふところの深い木立なのだろうか。
木うそは、福岡県の大宰府天満で1月7日に行なわれる「うそ替え」の行事に使われる、木彫りのうそ。うそは、首から頬にかけて美しい紅色をした鳥である。木うその象徴的なスタイルはたいへん面白い。人々はこの木うそを手に持つて、他人のものと取り替えて歩き、自分の一年分のうそを帳消しにするという。曲は祭りにぎわいの中に、そういう御都合主義的な「厄除け」行事のひょうきんな、そしてだまからかしの雰囲気を活き活きとしたのしく描きだしている。全合奏。



歌詞

さてもどかな春の海、釣り竿肩にびくを下げ 浦島太郎が来かかると 子供大勢たち騒ぐ、「これこれ何をさわぐのか」「はいはいおじいさん海亀が、今この浜に ついたのさ」言いつつ子供は棒切れで 亀の甲羅を突き遊ぶ、「何とそれは殺生な、わしお金をあげるゆえ 逃がしておやり これ子供」 亀は喜び二度三度 頭を下げて海に入る 明くる日太郎は岩に乗り 釣りに夢中になっていた そこへ出てきた海亀が 昨日のお礼と竜宮へ太郎を乗せてご案内 乙姫様のもてなしに 海の魚の踊り子の 舞い舞う姿や水の青「春は珊瑚の 八重桜 夏はヒラメの舞扇 秋はみるめの夕紅葉 冬は ま白き波の雪 見よやこの世の美しさ 四季折々の海の幸」 ああ面白や愉快やな 飲めや歌えの大騒ぎ 過ぎす月日も夢のうち 遊びに飽いて浦島は 土産にも 買った玉手箱 おしいただいて暇ごい村へ帰ると村は無く 家を探せど家は無く わが子わが母いずこ 変わらぬものは山と川 最後の頼みは玉手箱 あけてはならぬの戒めも 今は忘れてふたとれば 中からバツと白煙 顔にかかるとこはいかに 若き太郎は年老いて たちまち白髪のおじいさん たちまち白髪のおじいさん

長唄「桃太郎」

唄(うた)

稀音家 清水

稀音家 六千津

稀音家 六貴光

三味線(しゃみせん)

稀音家 薫

稀音家 佐千世

稀音家 六美春

蔭囃子(かげばやし)

望月 佐吉 社中

歌詞

昔むかし翁(じい)と婆(ばば)の語り草、翁は山へ芝刈りに婆は川へ洗濯に、ところへ一つの桃の実が水に流れてどんぶりごとどんぶりごとぞ来たりける。不思議や桃は二つに割れて中より生まれ出でたるは玉の様な男の子、桃から生まれた桃太郎、桃太郎とぞ名を呼びて。手しおにかけて育てける、その桃太郎成人し、爺と婆に打ちむかい。げに親の恩は真柴(ましは)かる山より高く衣洗う川の水より尚深し、これより海の彼方にあたり鬼住む島のありと聞く、我その島に打渡り醜(し)この鬼ども征伐し誉(ほまれ)を揚げて立ちかえり、御恩を返し申ししようと言えば二人は小躍りし天晴れ良い子や勇ましや、さらばそなたの門出を祝い老の鉢巻き八重だすき。かいがいしくも出で立ちし威勢を見れば地を走る犬も尾を巻き、空翔(か)ける雉(き)も御供と手をつくを、猿鷹(ざるまる)さえも見真似にて、お腰に着けた黍(きび)団子一つ下され御供して征伐にこそ向かいけれ。城門高くくろがねの扉も堅き要害(ようがい)を守る赤鬼青鬼ども金(かな)ざい棒(ぼう)をかいこんで此方(こなた)を吃(きつ)とにらまゆる、桃太郎これを見てヤアヤア鬼ども能(よ)つく聞け。大は真先ワンワン、雉子はケンケンホロホロと羽ばたきしてぞ掛りける猿もおくれず歯をむいて、をめき叫んで攻めければ。桃太郎鬼の大將生け捕って数多(あまた)積みたる宝をば、宝車(たからぐるま)に七車(ななぐるま)曳(ひ)けやひけ凱歌(かちどき)をあげて曳き出すくるまの前にさっと開いた文字も日本一の手柄もの、手柄ものぞ讃(ほ)める。

解説

桃太郎の話もその起源については諸説あるようで、古いものでは古事記から説き起こすものがあります。また、ゆかりの地についても現在では岡山県岡山市が有名ですが、他にも香川県高松市、愛知県犬山市、奈良県磯城郡田原本町などがあり、全国で七団体が「全国桃太郎会連合会」を結成して桃太郎サミットを開催するなど、桃太郎を学び、全国の桃太郎愛好家の方々と共に地域おこしや桃太郎のおとぎ話の素晴らしさをより広く伝える活動をしています。(連合ホームページより)

現在一般的に語られている桃太郎の話は、明治時代に発刊された「日本昔噺」が元となっており、川に洗濯に行ったおばあさんが上流から流れてきた桃を拾って家に帰ると桃から桃太郎が生まれ、成長して犬、雉、猿と共に鬼退治に行き、財宝を土産に持ち帰るといふ勧善懲悪の物語です。犬、雉、猿がお供をする条件としておばあさんが桃太郎に持たせた黍団子が登場することから岡山の吉備津神社が有名になっています。

保護者の方へのお願いです。このプログラムの内容がお子様には難しくご理解いただけない場合には、保護者の皆様方からお子様に分かり易くご説明願います。

【常磐津(節)】ときわ(ぶし)

三味線を伴奏楽器とし、太夫と呼ばれる語り手が物語を語る日本の伝統音楽の浄瑠璃(じょうるり)の一つであり、江戸時代中期に常磐津文字太夫が江戸で創始したものです。

三味線は16世紀にわが国に渡来したとされ、当時は扇拍子などの伴奏で語られていた浄瑠璃物語と結びつき、各地で多種多様な浄瑠璃が誕生しました。後に大阪では義太夫節が生まれ、人形芝居と結びついて大流行。その流れは現代にまで及びます。義太夫より少し遅れて京都で創始された一中節(いちちゅうぶし)は、後に江戸に活動拠点を移し、その門から出た豊後節は歌舞伎音楽として発達。常磐津節、清元節(きよもとぶし)などに枝分かれしました。今日の新内節(しんないぶし)もこの系統の流れを汲みます。なかでも常磐津の演目には劇的なものも多く、歌舞伎音楽として発展し、また日本舞踊の伴奏としても使用されています。

浄瑠璃とは元々は仏教語で清浄・透明な瑠璃(青金石)、または清浄なものたをえのことを言い、浄瑠璃世界と言えば薬師如来の浄土で東方にあるとされます。十二段草紙浄瑠璃物語は、浄瑠璃姫と牛若丸の恋物語のことですが、後には浄瑠璃と言えば音楽ジャンルの一つを指すようになります。

【琵琶】びわ

琵琶は7〜8世紀に中国からわが国に伝来し、正倉院には五弦琵琶および5面の四弦琵琶が残っています。現代も雅楽に用いられる琵琶を「楽琵琶(がくびわ)」と呼ばれるのに対して、盲目の僧侶たちが琵琶を手に経文などを弾き語りしたものを「盲僧琵琶」といいます。鎌倉時代には琵琶法師と呼ばれる盲目の演奏家が琵琶を伴奏に『平家物語』を語る芸能が始まり、人気を博しました。こうした伝統から琵琶を伴奏に物語を語る芸能が確立し、16世紀に薩摩(現代の鹿児島)で薩摩琵琶が

【長唄】ながうた

生まれ、勇壮な曲調で広く受け入れられるようになり、明治以降は東京を中心に全国で演奏されるようになりました。一方、明治時代中期には筑前(現代の北九州)に残っていた盲僧琵琶を元に三味線音楽を取り入れた筑前琵琶が創始されました。薩摩琵琶、筑前琵琶共に四弦と五弦が使用されますが、薩摩琵琶の方がやや大ぶりで、撥の形は両者に大きな相違があります。薩摩琵琶が男性的、筑前琵琶は女性的と言われますが、今回の演奏会は筑前琵琶の演奏です。

長唄は歌舞伎と共に発展してきました。初期の歌舞伎では能楽の四拍子(笛・小鼓・大鼓・太鼓)などが使用されたようですが、伝来した三味線の流行とともに主奏楽器として使用されるようになりました。その後、時代の変化や観客の好みに合わせた歌舞伎演目に相応しい伴奏として様々な作品が作曲され、また他の三味線音楽との競演も行われるようになりました。幕末以降は、歌舞伎の伴奏としてではなく長唄の演奏のみを鑑賞することも行われるようになり、歌舞伎とは切り離れた楽しみ方も一般化しました。明治時代には長唄の定期演奏会が催されるようになり、大正時代にはこれが全盛期を迎えることとなります。また、歌の伴奏としてではなく、楽器としての三味線に着目した曲も広く作曲されるようになり、邦楽のなかでは多様性に富んだ領域の広いジャンルとなっています。

長唄は唄と三味線のみで演奏される形態のほか、鳴物と呼ばれる打楽器等が加わることにより、より賑やかで迫力のある演奏が楽しめます。鳴物には太鼓(たいこ)、小鼓(こづつみ)、大鼓(おおづつみ・おおかわ)、笛(能管(のうかん)・篠笛(しのぶえ))などがあり、舞台には出ずに黒御簾のなかで演奏する場合があります。「蔭囃子(かげばやし)」と言い、今回はこの蔭囃子での演奏となります。